Meisenheimer 型錯体の溶媒和による 反応規制と立体選択性

大沢茂樹; 武田 誠*

(昭和55年9月8日受理)

Control of Reaction and steric selectivity obtained by the Solvation of Meisenheimer Type Complexes

SHIGEKI OHSAWA and MAKOTO TAKEDA

Abstract – The structures of Meisenheimer type complexes formed by the bonding of anionic σ complexes with various cations are confirmed or established from observation of their IR and ¹H NMR, ¹³C NMR, ¹⁴N NMR spectra.

The IR spectra of a relation between sevral anionic σ complexes and cations have been reported from experimental results of the authors.

A normal aromatic NO_2 group has strong absorptions at 1530-1550 and 1345-1350cm⁻¹ due to the asymmetric and symmetric stretching mods.

The N-O symmetric stretching in 2,4,6-trinitroanisole was reported to decrease from 1343 to 1300-1290 cm⁻¹ and the asymmetric stretching from 1552 to 1495-1483cm⁻¹ on conversion to the 1,1-dimethoxy-2,4, 6-trinitrocycrohexadienate complexes.

On the basis of this results, it is concluded by experimental results that the N-O asymmetric stretching in 2,4,6-trinitrochlorobenzene decrease from 1350 to 1300-1294cm⁻¹ and the asymmetric stretching decrease from 1553 to 1500-1479cm⁻¹ on conversion to the 1-methoxy-1-chloro-2,4,6-trinitrocyclohexadienate complexes.

The stability of these complexes depends upon both shifts of asymmetric and symmetric stretching vibration bands of ketal bond and NO₂ bond.

The symmetric mods is determined by both N-C and N-O force constants, and hence both bond orders.

The N-O force constant, and hence the N-O bond order is determined from the overall force constant of a large extent for the asymmetric stretching vibration.

A relation between characteristic shift of both ¹³C, ¹⁴N NMR spectra and IR spectra of NO₂ groups exhibit obtained by the difference of cations.

Control of the reaction and the steric selectrivity by interaction of solutes to solvents depends upon both number and orientation of donor and acceptor.

It is confirmed or determined from changes of ^{1}H NMR spectra that the control of reaction is derived from the relation between concentration of ions and ionic pairs make an attack on the σ complexes in solutions.

On the basis of these results, it is concluded that the changes of structures originated from the control of reaction and steric selectivity by solvation in Meisenheimer type complexes synthesis.

^{*} 茨城大学工学部金属工学科(日立市中成沢町)

1. 緒 言

芳香族求核置換反応および求核付加反応によってつく られるMeisenheimer 型錯体は, 反応機構として溶媒 -溶質間相互作用(溶媒和)によって反応規制と立体選 択性が行われる。 Meisenheimer 型錯体は電子吸引性 基であるNO2基の数によって選択的に溶媒和する。すな わち NO_2 基1個のときはジクロロメタン溶媒,2個のと きはベンゼン溶媒, 3個のときはアルコール溶媒が選択 される。これらの選択的溶媒和に関して、溶媒分子の化 学構造と溶媒和との関係, 攻撃試薬のイオンまたはイオ ン対としての反応に関与する機構と,溶媒和との関係な どを, IR, UV, Vis, 1HNMR, 13CNMR, 14NNMR スペクトルの測定結果から,溶媒効果を微視的に捉え, 検討した。特に錯体の構造に関与する反応機構は、溶媒 自身の分極性と不対電子の存在を考慮して, 遷移状態に おける溶媒和状態を, 反応の出発系から生成系に至る間 に考えられる溶媒寄与の状態から考えて検討した。この 反応機構と構造のイメージから, 従来考えられていた溶 媒効果を無視した反応機構とは非常に異なった, 具体的 な知識を提供するものと考える。

2. 実験結果と考察

2.1. Meisenheimer型錯体の構造と反応機構

2.1.1 IR スペクトル

IRスペクトルによる NO_2 基とケタール結合の振動様式の変化との関係について調べたところ、錯体の安定性について興味ある結果が得られた。

芳香環に結合している NO_2 基は, $1530\sim1550\,cm^{-1}$ と $1345\sim1350\,cm^{-1}$ に逆対称および対称伸縮振動にもとづく吸収帯が現われる。 2, 4, 6-トリニトロアニソールとメトキシドイオンからMe isenhe i mer型錯体をつくると,逆対称伸縮振動は $1552\,cm^{-1}$ より $1495\sim1483\,cm^{-1}$ に,対称伸縮振動は $1343\,cm^{-1}$ より $1300\sim1290\,cm^{-1}$ に減少する。これは $1343\,cm^{-1}$ より $1300\sim1290\,cm^{-1}$ に減少する。これは $1343\,cm^{-1}$ より $1300\sim1290\,cm^{-1}$ に減少する。これは $1343\,cm^{-1}$ より $1300\sim1290\,cm^{-1}$ に減少する。これは $1343\,cm^{-1}$ より $1300\sim1290\,cm^{-1}$ に対 $1300\sim1290\,cm^{-1}$

係から、Me i senhe imer 型錯体においては、 ν_{as} C-O-C-O-C ν_s C-O-C-O-C のシフトが ν_{as} NO2 と ν_s NO2 のシフトに関連していることをみつけることができる。また、錯体の分極性が大きいほど 不安定であることと、陽イオンのNO2 基およびエーテル 基の酸素を引きつける電荷の強さの違いが、安定度を支配する要素となることからも、ケタール結合とNO2 基の IR スペクトルによるシフトの差が、錯体の構造変化と安定度を示す尺度となることが肯定できる(図1~4)。 表 1 から、 2、4、6 - トリニトロ錯体では ν_{as} NO2, ν_s NO2 は低波数側にシフトし、 ν_{as} C-O-C-O-C, ν_s C-O-C-O-C は高波数にシフトする。表 2 から、

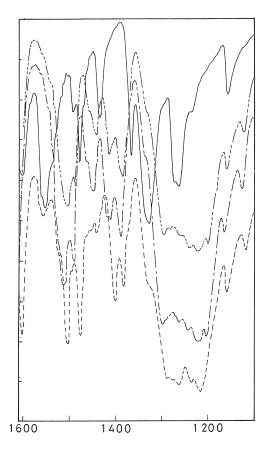


Fig. 1 Relation between the stabilities of Meisenheimer complexes were caused by the shifts of nitro groups and Ketals absorption bands. (2,4,6-trinitroccyclohexadienate)

-----K⁺ ---- Na⁺ ---- Li⁺ ---- Li⁺ ----- 2,4,6-trinitroanisole.

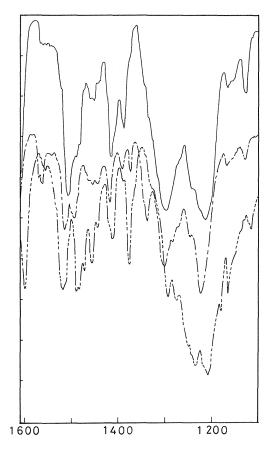
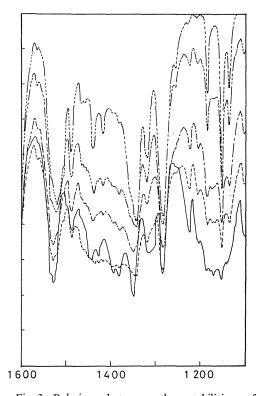


Fig. 2 Relation between the stabilities of Meisenheimer complexes were caused by the shifts of nitro groups and ketals absorption bands.

---- NR₄⁺ --- Ba⁺OCH₃

2,4-ジニトロ錯体では ν_{as} NO $_2$, ν_s NO $_2$ は高波数にシフトし, ν_{as} C -O -C -C -O -C は低波数にシフトする。これらのことから,陽イオンがNO $_2$ 基およびエーテル基の酸素と接触イオンを作って溶液中で安定化することは,錯体の構造とNO $_2$ 基の位置および数によって支配されることが結論ずけられる。

 NO_2 基の低波数側へのシフトは,陰イオン σ 錯体の局在化構造から非局在化構造への寄与が,出発系の非局在化構造から局在化構造への寄与よりも大きいためであると言える。N-O結合次数は,逆対称伸縮振動の全体の力定数に大きく寄与することが知られているが,ケタール結合の逆対称伸縮振動の全体の力定数は,N-C結合とN-O結合の両方の力定数と結合次数に依存するこ



— Potassium 1,1-dimethoxy-2,4-dinitrocyclohexadienate. (immediately after preparation).
——, ——,----- A few hours after preparation.

5) とからも,ケタール結合の対称伸縮振動の変化がNO₂ の対称伸縮振動に変化を与えていることが理解できる。

2.2 錯体の紫外・可視スペクトルと反応機構

2.2.1 イオン対による反応機構とスペクトル

○一、Pーニトロアニリンのジクロロメタン溶液中のカリウムアルコラートとの反応は、Meisenheimer型錯体の生成速度を比較することにより次のような機構が推定される。まず○一ニトロアニリンの反応機構としては次のようになる。

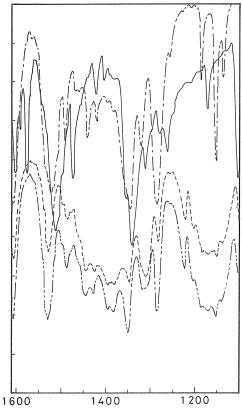


Fig. 4 Relation between the stabilities of Meisenheimer type complexes were caused by the shifts of nitro groups and ketals absorption bands.

----- Potassium glycol-2,4 dinitrophenylether.

このような接触イオン対をつくる反応機構は,図 5 に示すスペクトルのシフトからも明らかにされた。図 5 は,ジクロロメタン中の0ーニトロアニリンを $KOCH_3$ のイオン対が攻撃することによりMeisenheimer型錯体をつくり,そのとき0ー位のニトロ基を介して K^+ イオンと OCH_3^- イオンが接触イオン対となり錯体をつくる機構である。このとき,0ーニトロアニリンでは NH_2 基と NO_2 基が分子内水素結合しているが,イオン対の攻撃により分子内水素結合は破れ,核攻撃をするとき接触イオン対となる。錯体の安定度は,隣接するアミノ基が溶媒と水素結合し溶媒和することにより保たれる。

p-ニトロアニリンの反応機構としては次のようになる。

$$\begin{array}{c|c} O & & \\ \hline O & \\ \hline O$$

no contact ion pair (接触しないときのイオン対)

このような反応機構からMeisenheimer型錯体の生成速度を比較すると、O-錯体の方が反応しやすいことが理解される。O-錯体の方が生成しやすいのは反応速度定数の比較からO/P=1.6となる。すなわち 5.80×10^{-3} $sec^{-1}/3.63\times10^{-3}$ sec^{-1} である。活性化エネルギーによる比較はO/P=2.6である。すなわち3.61/12.90 (kcal/mol)である。これによってO-位とP-位の NO_2 基により接触イオン対をつくる反応機構と接触イオン対を作らない反応機構とが明らかになり、P-位は NO_2 基が K^+ と結合して、 NH_2 基の結合している炭素を OCH_3 イオンが攻撃する遊離イオンの核攻撃とみなすことができる。

ジクロロメタン溶液中のO---トロアニリンを攻撃してMeisenheimer型錯体をつくったメタノリックKOCH3は,接触イオン対として反応機構を明らかにしたが,イオン対溶媒としてのメタノールは,<math>50℃近傍で溶媒和しているアミノ基のジクロロメタンを置換反応して,アミノ基にメタノールが水素結合する。それは図5から明らかなように室温において $435\,nm$ に吸収極大をもつ錯体(実線)が,50℃ 近傍で長波長にシフトし $445\,nm$ に吸収極大をもつ錯体(破線)に変化する。このレッドシフトの機構は次のようにあらわされる。

この機構から深色効果の構造が明らかとなった。また、-15% 近傍ではブルーシフトし、 $420\,nm$ に 吸収極大をもつ錯体 (一点鎖線)が現われる。この反応機構は次のようにあらわされる。

Table 1 Vibrational frequencies (cm $^{-1}$) and assignment for the nitro groups and ketals. (1,1-dimethoxy-2,4,6-trinitrocyclohexadienate) Compounds

	ναυΝΟ ₂	νεNO₂	vasC-O-C-C)-C	vsC-O-C-O-C vsC-O-C
$[C_{6}H_{2}(NO_{2})_{3}(OCH_{3})_{2}]^{-}Li^{+}$	1488	1296	1240,1222	,1202	1050
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^-Na^+$	1490	1298	1243,1225	,1205	1055
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^{-K}^+$	1483	1290	1238,1224		1068,1048
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^-Rb^+$	1490	1298	1243,1225	,1205	1068,1048
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^-Cs^+$	1490	1298	1243,1225	,1205	1068,1048
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^-Ca^+OCH_3$	1490	1292	1245,1228	,	1057,1048
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^-Sr^+OCH_3$	1492	1300	1243,1215		1057,1048
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^-Ba^+OCH_3$	1495	1300	1247,1224		1057,1048
$[C_6H_2(NO_2)_3(OCH_3)_2]^-NR_4^+$	1488	1294	1243,	,1207	1063,1052,1043
[C ₆ H ₂ (NO ₂) ₃ OCH ₃]	1552	1343	1263,		1077
$[C_6H_2(NO_2)_3.OCH_3.C1]^-Li^+$	1498	1298	1246,	1208	1055
$[C_6H_2(NO_2)_3.OCH_3.C1]^-Na^+$	1498	1298	1246,	1208	1055
$[C_{6}H_{2}(NO_{2})_{3}.OCH_{3}.C1]^{-}K^{+}$	1479	1280	1265,1238	,1219	1065,1048
$[C_6H_2(NO_2)_3.OCH_3.C1]^-Rb^+$	1500	1300	1246,	1208	1055
$[C_6H_2(NO_2)_3.OCH_3.C1]^-Cs^+$	1498	1298	1248,	1209	1058
$[C_6H_2(NO_2)_3.OCH_3.C1]$ Ca^+OCH_3		1295	1250,1218		1050
$[C_6H_2(NO_2)_3.OCH_3.C1]^-sr^+OCH_3$	F3 1496	1295	1245,1223		1055
$[C_6H_2(NO_2)_3.OCH_3.C1]^-Ba^+OCH_3$	H ₃ 1497	1296	1244,1223		1055
[C ₆ H ₂ (NO ₂) ₃ Cl]	1553	1350			
$[C_6H_2(NO_2)_3OCH_3.C1]^-NR_6^+$	1488	1294	1250,1234	1208	1065,1052,1043

Table 2 Vibrational frequencies (cm⁻¹) and assignment for the nitro groups and ketals.

Complexes		vasNO ₂	vsNO ₂	vasC-0-C-0-C	vsC-O-C-O-C
2,4-Dinitro- anisole.					
anisore.		1520	1343	1256,	1070
	Na ⁺	1528	1348	1223,1205,1170	1093,1058,1029
H ₃ CO CH ₃ NO ₂	к+	1528	1348	1223,1205,1170	1093,1058,1029
[[]	Rb ⁺	1528	1348	1223,1205,1170	1093,1058,1029
Ÿ	Cs ⁺	1528	1348	1223,1205,1170	1093,1058,1029
NO ₂	NR4 ⁺	1528	1358	1223,1205,1170	1093,1058,1029
H 2 C CH 2					
	K ⁺	1528	1348	1223,1205,1170	1090,1065,1053 1025.
NO ₂	Na ⁺	1528	1348	1223,1205,1170	1080,1066,1055 1027.
Y NO ₂	NR4 ⁺	1528	1348	1222,1204,1170	1090,1065,1055 1026.
l-(β-hydroxye -2,4-dinitrob		1510	1.340	1263,	1089, 1025

ブルーシフトによる浅色効果は,アミノ基の炭素に付加結合したOCH $_3$ が,-15℃近傍では脱離して再びイオン対となりNO $_2$ 基の酸素に会合した状態が推定される。 $_8$) $^{-12}$) Kamlet らによる $_8$ H $_2$ 基に溶媒が水素結合するときの深色効果の考え方は, $_1$ -アミノ $_1$ -メトキシー

2ーニトロシクロヘキサジエネートのようなMeisenheimer型錯体の溶液中の構造に適応すると極めて良く理解できることが明らかにされた。これは基質による溶媒への水素結合で、NについたプロトンがアルコールのOH基のO原子に引っ張られる。したがってN原子の電

荷は増大して、アミノ基のUVスペクトルのK帯は可視 部にシフトして深色効果をもたらす。

メタノリックKOCH3溶媒中の錯体(三点鎖線)の反応構はつぎのようにあらわされる。

この錯体の吸収極大は430と455nmに現われ,深色効 果した構造に、さらにp-dに OCH_3 が付加結合した 状態の構造を示す。このスペクトルは420と445nmの 重なった状態のスペクトルで、上に示した構造をつくる ことは、スペクトルの結果から確実なものと推定できる。 多くの有機反応においては遊離または解離イオンより も、イオン対の形で反応が行われることが多い。イオン 化能力の大きい溶媒中での接触イオン対 (methanolic KOCH3)は、より反応性の大きい溶媒介入イオン対に 容易に変化して,加溶媒分解をうける。接触イオン対の 反応性は、対イオンX[○]の影響を受け易く、溶媒介入イ オン対やフリーイオンR[⊕] の反応にはほとんど対イオン の影響がなく、これらはむしろ用いた溶媒の溶媒和によ って反応性が決定される。このような結果から、Meisenhe imer型錯体もイオン対による反応であることは, これらの事実から決定的なものと言える(図5)。

2.3 NMRスペクトルと溶媒効果

出発系からMeisenheimer 型錯体が生成したのち,

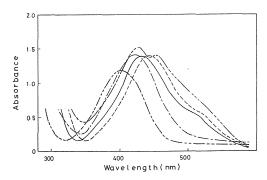


Fig. 5 The visible absorption spectra of 1amin o-1-meth oxy-2-nitrocyclohexadienate in a mixed solution of methanolic KOCH₃ and dichloromethane by changes of temperature.

A spectrum in the vicinity of -15°C.
 A spectrum at temperatures rang-

- A spectrum at temperatures ranging from 5 to 20°C.

------ A spectrum in the vicinity of 40°C.

A dichloromethane solution of onitroaniline.

 — A methanolic KOCH₃ solution of 1-amino-1-methoxy-2-nitrocyclohexadienate.

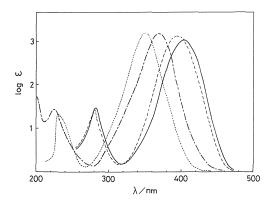


Fig. 6 Comparison of spectra obtained by solvent effects.

A MeOH solution of o-Nitroaniline.

----- A CH₂Cl₂ solution of o-Nitroaniline.

----- A MeOH solution of P-Nitroaniline.

A CH₂Cl₂ solution of P-Nitroaniline.

さらに錯体に過剰の攻撃試薬であるイオン対を与えることによって、錯体がさらに複雑な構造をとることを想定して、錯体と溶媒との水素結合による構造および攻撃試

薬のイオン対が過剰に存在するときの構造のあり方,また錯体が安定に存在するための条件として,錯体のもっとも活性な部分を他の反応試剤から守るための立体的な効果を中心にして,それらの機構と構造を明らかにする目的で,1HNMR,13CNMR,14NNMRスペクトルによる検討を試みた。

ニトロベンゼン誘導体とメトキシドイオンまたはアミドイオンの反応によってMeisenheimer型錯体(I)~(M)が生成するが、これらの錯体(I)~(M)は、メトキシドイオンが過剰に加えられると次のような錯体の構造に変ることが推定される。

これら(V)から(\mathbf{M})の錯体は、ジクロロメタン+メタノリック KOCH3 の混合溶媒中とメタノリック KOCH3 溶媒中では構造が異なることが考えられるので、 1 HNMR および 13 CNMR スペクトルにより検討した。 1 Hは τ 値を使用した。

2.3.1 ¹ HNMR スペクトルと構造

している有力な証しとなる(図7)。

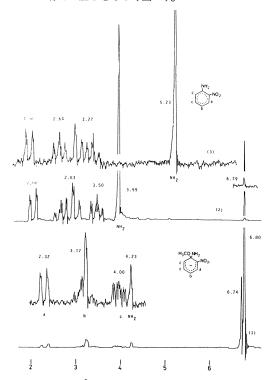


Fig. 7 The ¹H NMR spectra of Meisenheimer type complexes in DMSOd₆.

- A DMSOd₆ solution of Potassium 1amino-1-methoxy-2-nitrocyclohexadienate.
- (2) A methanolic KOCH₃ added to dichloromethane solution of o-Nitroaniline makes mixed solution.
- (3) A DMSO d_6 solution of o-Nitroaniline.

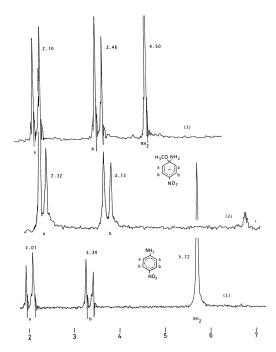


Fig. 8 The ¹HNMR spectra of Meisenheimer type complexes in DMSOd₆.

- type complexes in DMSO a_6 . (1) A DMSO d_6 solution of p-Nitroaniline.
- (2) A DMSO_{d6} solution of p-Nitroaniline and methanolic KOCH₃ in the ratio of 1:50.
- (3) A DMSOd₆ solution of p-Nitroaniline and methanolic KOCH₃ in the ratio of 1.1.

溶媒効果による構造の変化およびそれに伴う反応機構 を検討するために,溶媒をジクロロメタンからメタノリ ックKOCD₃に変え, ¹HNMR スペクトルのシグナルが 低磁場に共鳴するか, 高磁場に共鳴するかを調べた。さ らに錯体(X)の構造を求めるためには、p-ニトロアニシ ジンのメタノール溶液の構造を知り、その¹HNMRの環 プロトン共鳴するシグナルの磁場を求め,錯体(X)から錯 体(K)への構造変化を追及した。錯体(Ⅲ)のメタノリック KOCD₃溶液中の構造が錯体(X)に変る証拠は、特有の シグナルがτ値として1.33に共鳴することである。これ は環プロトンの一つ, CCH 結合のプロトンのシグ ナル 1.33 が新しく現われたものである。それにともない, a-Hは1.99にb-Hは3.34にNH2は4.46に共鳴 する。環プロトンは、錯体(Ⅲ)のa-H 2.08,b-H 3.44 と比較して低磁場にシフトし,さらに錯体(Ⅲ)にはない こC OR の環プロトンのシグナルが 1.33 に 現 われ て いる。この構造が錯体(X)をあらわすもう一つの特徴は,

 ${}^{\prime}$ C ${}^{\prime}$ R 結合のORのプロトンが 5.40 化共鳴することである。また錯体(${}^{\prime}$ のNH $_2$ のシグナルは 4.22 化共鳴するが,錯体(${}^{\prime}$)では 4.46 化共鳴し高磁場に シフトする。この理由は隣接する ${}^{\prime}$ C ${}^{\prime}$ NH $_2$ 指合のNH $_2$ 基が影響を受けているためである。

錯体(X)は錯体(X)とくらべ, a-H 1.93, b-H 3.30, c-H 1.73 と高磁場にシフトする。これらのスペクトル は錯体(X)をメタノリックKOCD3溶媒中に一週間放置 した状態を示す。この状態の錯体のスペクトルにはNH₂ のシグナルが現われない。これは、隣接する C H 結合を作るときに, C C NH 2 結合のOCH 3 基が脱 離して $C-NH_2$ 結合を作ったためと考えることが で きる。さらに特徴的なシグナルはCCH 結合のOR のプロトンの共鳴が 5.38 に現われる。これは錯体(X)の ンC C OR 結合のOR のプロトン 5.40 よりも低波数に ... シフトしている。このシフトの理由は,隣接する NH_2 基のために結合が強くなったためと考察することができ る。これは明らかに錯体(四)の出現を意味する。メタノー ル中のp-ニトロアニシジンはa-H 2.03, b-H 3.28, NH₂ 5.18 である。これらのシグナルは a — H以外はす べて低磁場にシフトしている。 CCH 結合のRのプ ロトンのシグナルは消失してこC-OR結合のORのプ ロトンが6.04 に共鳴している。これらの理由から錯体 (X)がpーニトロアニシジンに近いシグナルを示し, 錯体 (X)が錯体(K)に近いシグナルを示すことが理解できる。

図9に一週間放置後のメタノリックKOCD3中の錯体 のスペクトル錯体(区)を示したが、さらに長時間放置した 一ケ月後のメタノリックKOCD3中の錯体のスペクトル を示す。このスペクトルの特徴は錯体(X)と異なり, こC - OR 結合の環プロトン 1.73 のシグナルは消失して 3.10 に強いシグナルが現われb-Hのシグナルとなり, その両側に 2.73 と 3.40 に三重線のシグナルをもち,こ の3つのグループはb-H3.08の環プロトンのシグナル として共鳴する。 NH_2 のプロトンは 4.45 に共鳴し, $C \subset OR$ 結合のORのプロトンは 5.40 に共鳴する。 このことから錯体(X)がPーニトロアニシジンに近い構造 をとったスペクトルであることが理解できる(図10)。 錯体伽のスペクトルの特徴は、ことこのR 結合の環プ ロトンの1.75のシグナルである。このシグナルは、 錯 体(V)になると低磁場にシフトし2.23 に共鳴する。もう一 つの特徴はp-位のこCCNR の結合であり,錯体Mで はこの結合の環プロトンが5.38 に, 錯体(V)では5.35 に



Fig. 9 The ¹H NMR spectra of Meisenheimer type complexes in methanolic KOCD₃.

- A methanolic KOCK₃ solution of Potassium 1-amino-1-methoxy-4-nitrocyclohexadienate.
- (2) A week after preparation.
- (3) A CD3OD solution of p-Nitroanisidine.

共鳴する。このシグナルは錯体(M)の方が強いシグナルを示し,>C=OR=NH $_2$ 結合中のOCH $_3$ 基の脱離が,>C=OR=H 結合のRのプロトンに影響を与えていることを意味する(図11)。

錯体(Π)のスペクトルはa-H 1.99,b-H 2.58,C-H 3.14 であり, NH_2 は 4.24 \sim 4.22 に強い吸収帯を示す。この錯体をメタノリックK OC D_3 に溶解して 1HNMR スペクトルを測定したところ興味ある結果が得られた。 錯体(Π)から錯体(M)に構造が移る証しとして,特徴のあるシグナルが 1.14 に共鳴することである。このシグナルは CCH 結合の環プロトンであり,この結合のORのプロトンは 5.40 に共鳴する。 a-H 2.04,b-H 2.88 c-H 3.55 に共鳴し,環プロトンのシグナルは,錯体価にくらべて低磁場にシフトする。また NH_2 のプロトンは,4.48 に共鳴し高磁場にシフトする。

錯体図の>C<OR 結合の環プロトンのシグナルは

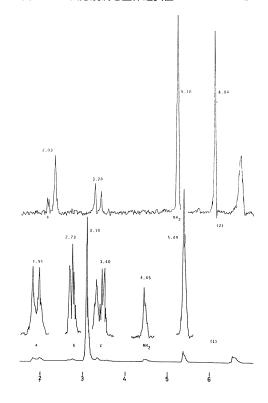


Fig. 10 The ¹H NMR spectra of Meisenheimer type complexes in methanolic KOCD₃.

- A methanolic KOCD₃ solution of Potassium 1-amino-1-methoxy-4-nitrocyclohexadienate (a month after preparation).
- (2) A CD3OD solution of p-Nitroanisidine.

1.63 に共鳴し,この結合のOR のプロトンは 5.35 に共鳴する。環プロトンのシグナルはa-H 2.76,b-H 3.40,c-H 3.88 に現われ,高磁場にシフトする。 NH_2 のプロトンは 4.46 に共鳴して,錯体(M)の構造は次のように示される(図 12)。

錯体 \mathfrak{M} の環プロトンはa-H 2.01, b-H 3.35 に共鳴し、 NH_2 のシグナルは 4.4 2 に共鳴する。この錯体 \mathfrak{M} をメタノリック $KOCD_3$ に溶解してスペクトルを測定した結果、CCDR の環プロトンは 1.71 に共鳴し、この結合のDR のプロトンは 5.4 0 に共鳴した。環プロトンのA-Hは 1.95 にB-Hは 3.2 9 にシグナルが現われ低磁場にシフトする。DR0 シグナルは 4.4 6 に現われ高磁

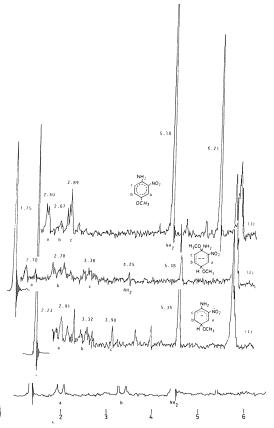


Fig. 11 The ¹H NMR spectra of Meisenheimer type complexes in methanolic KOCD₃.

- A methanolic KOCD3 solution of Potas Potassium 1-amino-1-methoxy-2-nitrocyclohexadienate (a few hours after preparation).
- (2) Immediately after preparation.
- (3) A CD3OD solution of o-Nitroanisidine.

場にシフトする。このシグナルのシフトから錯体(N)は錯体(XI)に変化したものと推定し、次のような構造を与えることができる(図13)。

2.3.2 ¹³C NMR スペクトルと構造

錯体(回をさらに確実に検討する目的で 13 C NMR スペクトルを測定した結果、 1 HNMR スペクトルには現われない次のようなことが明らかになった。錯体(回にとってもっとも特徴的なシグナルは、 1 C 1 NH $_{2}$ 結合を示すことと 1 C 1 R を示すことである。これらのシグナルは

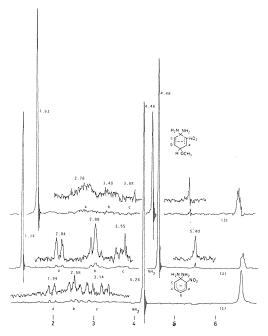


Fig. 12 The 1 H NMR spectra of Meisenheimer type complexes in methanolic KOCD3 and DMSO d_{6} .

- (1) A DMSOd6 solution of Potassium 1,1-diamino-2-nitrocyclohexadienate.
- (2) A methanolic KOCD3 solution of Potassium 1,1-diamino-2-nitrocyclo-hexadienate.
- (3) A few days after preparation (methanolic KOCD3).

f-cとして与えられ δ =147.92C大鳴し,もう一方はe-cとして δ =98.18C大鳴する。 溶媒としての $KOCD_3$ は δ =48.84C現われ,CC-OR 結合のC-ORのシグナルは δ =54.56C0大鳴する。これらの事実から,錯体(M)がもっとも妥当な構造であると言える(図14)。

2.3.3 ¹⁴NNMRスペクトルと構造

Me i senhe i mer 型錯体 $1-\rho$ ロロー 1 ーメトキシー 2, 4, 6 ートリニトロシクロヘキサジエネートの陽イオンによる影響を受けた σ 陰イオン錯体中の NO_2 基の挙動を 14 NNMR を使用して求めた結果,陽イオンの分子量の大きいほど低磁場にシフトすることが明らかとなった。すなわち δ = 1035.89 は Cs^{\dagger} イオンの影響を受けた NO_2 基であり, δ = 1039.40 は NR_4^{\dagger} イオンの影響を受けた NO_2 基である。これらのシフトから NR_4^{\dagger} イオンの方が 錯体が安定に存在することが明らかであり,錯陰イオンと陽イオンの分子量が同じ大きさになるほど錯体の安定

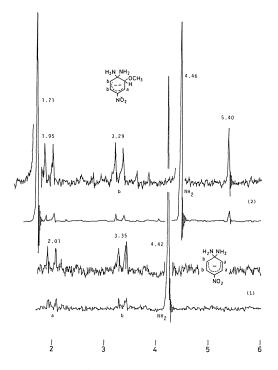


Fig. 13 The 1 H NMR spectra of Meisenheimer type complexes in methanolic KOCD3 and DMSO d_{6} .

- (1) A DMSOd₆ solution of Potassium 1,1-diamino-4-nitrocyclohexadienate.
- (2) A methanolic KOCD₃ solution of Potassium 1,1-diamino-4-nitrocyclohexadienate.

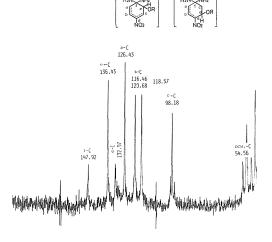


Fig. 14 A ¹³C NMR spectrum of Meisenheimer type complex in methanolic KOCH₃.

性が得られることが確証された(表3)。

Table 3 The relation between ¹³C, ¹⁴N NMR spectra and its shifts of NO₂ groups obtained by the cations of Meisenheimer complexes.

結 論

Mei senheimer 型錯体の溶媒による反応規制と立体選択性の研究から、次のような結果が得られた。①Meisenheimer 型錯体は、出発系から生成系に移るときの攻撃試薬はイオン対として反応する。②o-位とp-位のNO $_2$ 基の影響はo/p = 2.6 の速度定数の値の違いからo-位の反応が速いことが、接触イオン対による立体選択性の説明となる。

溶媒和による反応規制は、溶質と溶媒間の相互作用が 出発系の溶質と溶媒の相互作用により、攻撃するイオン 対の核置換反応に大きく寄与することが反応規制となっ た。

立体選択性は電子吸引性基の数と位置の違いにより、 それぞれメタノール、ベンゼン、メタノリックKOCH₃、 ジクロロメタンと溶媒が異なり、それぞれが溶媒和する ことにより、錯体の安定度に大きく寄与することが解明 された。(中部化学関係学協会第10回秋季大会にて発 表)

参考文献

- 1) J. Meisenheimer, Ann. Chem., 323, 205 (1902).
- E. C. Bergmann, S. Pinchas, Rec. Trav. Chim. Pays-Bas, 71, 161 (1952).
- 3) M. J. Strauss, Chem. Rev. 70, 667 (1970).
- 4) S. Ohsawa, H. Nagaue, Nippon Kagaku Kaishi, 79 (1974).
- 5) K. A. Kovar, Archiv. Pharm., 307, 100 (1974).
- 6) F. Del Cima, G. Biggi, F. Pietra, J. Chem. Soc., Perkin II 1973, 55.
- 7) M. Tsuboi, Kagaku no Ryoiki, 7, 611 (1953).
- M. J. Kamlet, R. R. Minesinger, E. G. Kayser,
 J. Org. Chem., 36, 3852 (1971).
- 9) M. J. Kamlet, R. W. Taft, J. Amer. Chem. Soc.,

- 98, 377 (1976).
- R. W. Taft, D. Gurka, et al., J. Amer. Chem. Soc., 91, 4801 (1969).
- 11) R. W. Taft, M. J. Kamlet, J. Amer. Chem. Soc., 98, 2886 (1976).
- 12) T. Yokoyama, R. W. Taft, M. J. Kamlet, J. Amer. Chem. Soc., 98, 3233 (1976).
- 13) S. Ohsawa, Nippon Kagaku Kaishi, 1486 (1973).
- 14) S. Ohsawa, Nippon Kagaku Kaishi, 456 (1976).
- 15) S. Ohsawa, M. Takeda, J. Faculty Engineer. Ibaraki Univ., 10, Vol. 26 (1978).
- 16) R. Foster, R. K. Mackie, J. Chem. Soc., 3796 (1963).

- H. Hosoya, M. Hosoya, S. Nagakura, Theoret. Chim. Acta (Berl.) 12, 117 (1968).
- R. Foster, C. A. Fyfe, Tetrahedron, 21, 3363 (1965).
- 19) S. Sekiguchi, Chem. Org. Synth., Vol. 36, No. 8, 2 (1978).
- 20) S. Ohsawa, M. Takeda, J. Faculty Engineer. Ibaraki Univ., Vol. 25, 102 (1977).
- 21) S. Ohsawa, M. Takeda, Presented at the 10th Annual Meeting of the Relation between CHUBU Chemical Society of Japan, Hamamatsu, Autumn, 1979.